

令和８年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

- 社会に貢献する共創力をみがく（主体性・寛容性・探究心を養い共にによりよく生きる力を育む）
- 国際社会の様々な人や組織と共に活躍できるよう、多様な国際交流プログラムを提供し、英語力の向上と国際理解の習得に取り組むと同時に社会の課題を発見し解決できる人材を育てる学校。
 - 子どもたちの多様な才能を共に見つけ、更に伸ばし、それが生かせる未来を創造できる多様性のある教育システムを提供する学校。
 - 常により先進的な教育プログラムと学校運営のスタイルを提供できる学校として、府民とその子どもたちの信託に応える学校。

2 中期的目標

1. 学力向上

- 基礎学力の定着と向上を全教員の目標とし、生徒の将来の選択肢を広げていけるよう、他教科との有機的なつながりを意識した、授業改善に取り組む。
- 学習・学校行事・課外活動・家庭生活時間のバランスを考え、生徒の授業外での学習時間数を確保するよう、自己の時間管理を促す。
- 少人数展開授業により、習熟度の格差を是正すると同時に、より高い専門性を生徒に習得させる。
- 生徒一人一人がめざす進路に向けて進むために、計画的かつ継続的な学習と個性を伸ばせるように、教員は伴走者としてきめ細やかに対応する。
- 様々な事情で登校が難しい生徒に対して、ICT の活用などにより、適切に教育が届く環境を整え、生徒の学習が途切れないようにする。
- 学校教育自己診断・授業アンケートを実施し、全教員の授業力の分析を行い、生徒へ基礎学力の定着が徹底されるように授業力の向上に努める。
- 高校１年次の数学（授業内の言語は英語）において、英語習熟度や数学理解度に応じた習熟度別クラスを設定し、海外大学進学を視野に入れた授業を展開する。
- 高校２年次のグローバルコミュニケーション（GC）コースにおいて数学クラスの言語の選択（日本語・英語）ができるようにし、生徒の進路に合わせた授業を展開していく。
- 高校２・３年生の英語において習熟度別授業を行い、生徒の英語力の向上に努める。

※教育産業が提供する外部評価基準（GTZ）における CD ゾーンについて、令和 10 年度まで 10％以下を維持する。（R5：8％、R6：6％、R7：8％）
※令和 10 年度までに授業満足度調査において 80％以上の肯定的な回答を維持する。（R5：68.1％、R6：80.1％、R7：83.2％）

2. IB 教育・探究学習を推進する

- 「総合的な探究の時間」で全生徒に対し国際バカロレア（IB）のコア科目 TOK を実施し、生徒の論理的思考力及び批判的思考力を育成する。
※TOK＝Theory of Knowledge（知の理論）
 - 中学校から「IB の学習者像」を授業や HR の中で取り上げ、生徒の IB に対する関心を高めていく。
 - IB コースの授業を担当している教員が IB コース以外の授業を担当し、IB 教育の手法にて授業をすることにより、他教科とのつながりや背景などを踏まえた授業展開を行い、生徒が様々な視点で物事を見ることができるようにする。
 - 教員と IB のコアである ATL（Approaches to teaching and learning：学習のアプローチ）を研修にて確認し、生徒の学習態度を向上させる。
 - IB 理解を深めるために高校１年次の IB 説明会を充実させると同時に、PreIB セッションを通して、IB の学びを体験できる機会をつくる。
 - 府立学校として、生徒に IB コースを学ぶ機会を維持するために、IB コースの生徒については、16 名～20 名程度選抜する。
- ※ディプロマ・プログラム（DP）スコアの平均点を令和 10 年度までに 30 点以上を維持する。（R5：30.9 点、R6：33.5 点、R7：34.2 点）
※IB コース生のフルディプロマ取得率を令和 10 年度までに 80％以上を維持する。（R5：78％、R6：90％、R7：100％）
※IB コース受講生徒数を令和 10 年度までに 40 名以上にする。（R5：30 名、R6：39 名、R7：37 人）

3. 個性を見つけ、可能性を伸ばす

- キャリア教育を中学１年から段階的に進め、生徒一人一人が自分の個性や能力を認識させる機会を作り、自らの進路を切り開く力を身に付けさせる。
- 学校は英語教育や国際理解教育の機会を充実させ、生徒の英語への興味関心を高めると同時に、英語 4 技能 5 領域の向上に取り組み、生徒が英語を使った発信力を向上するように機会を設ける。
- 運営管理者（学校法人大阪 YMCA）の多様な国際交流事業等を積極的に展開し、生徒が多様性を受け入れ、他国の人々と協働できる態度を身につけるように取り組む。
- 探究活動や課外活動等を通して、生徒の知識や技能を向上させ、進路選択に向けた実績となる活動（検定、コンテスト参加、ボランティア活動、beyond 万博）を促進する。
- 外部講師を招いた各種講演会や研修会を開催し、生徒一人一人が自分の興味の方向性を理解させ、自分の意見を述べる態度を養成する。
- 本校の教育の特色を理解してもらい、大学入学後の生徒をさらに伸ばしてもらえる中学校・高校・大学連続した教育の仕組みづくりに着手する。

※英語の CEFR 目標 ＜CEFR A1＝英検 3 級、A2＝英検準 2 級、B1＝英検 2 級、B2＝英検準 1 級＞

高校 1 年時 CEFR				高校 2 年時 CEFR				高校卒業時 CEFR			
B 1	60%	／	B 2 10%	B 1	100%	／	B 2 10%	B 1	100%	／	B 2 25%

- ※全生徒が令和 10 年度までに年 1 回以上の大会・コンテストに出場する。（R5：78％、R6：68％、R7：70％）
※国際コンテスト・大会の出場者を令和 10 年度までに年間 10 名以上出す。（R5：12 名、R6：8 名、R7：15 名）
※大学模擬授業の開催を令和 10 年度までに年 3 回以上行う。（R5：3 回、R6：2 回、R7：4 回）
※海外研修旅行の実施を令和 10 年度までに年に 3 回以上行う。またその参加者合計数 150 名以上を維持する。（コロナ後）
（R5：1 回・100 名、R6：3 回・150 名、R7：5 回・180 名）
※外国からの教育旅行・インターンの受け入れを令和 10 年度までに年間 60 名以上を維持する。（コロナ後）（R5：54 名、R6：80 名、R7：224 名）
※交換留学（姉妹校）の提携を令和 10 年度までに 3 校以上にする。（R5：1 校、R6：1 校、R7：3 校（見込））

4. 生徒・教職員が安心して生活できる環境づくりを行う

- (1) 基本的な生活習慣を確立し、規律ある行動をとることのできる、社会性の豊かな生徒を育成する。
- (2) 「生徒の行動規範 (Suito Model)」を通して、生徒が社会の一員としての責任感を身につける。
下記の点に着目し、生徒一人ひとりの個性を大切にするとともに、自律した一人の社会人としての責任ある行動、思いやりのある行動を定着させる。
 - ・希望をもって共に生きる社会の実現をめざした学校をつくる。(YMCA の基本理念)
 - ・未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身につける。(IB の基本理念)
 - ・社会が求める資質・能力を身につける。(経済産業省「社会人基礎力」)
- (3) 個別に支援が必要な生徒への対応は、校内の特別支援委員会を中心に組織的に対応し、きめ細やかな運用を行う。
- (4) 特別な支援を要する生徒・保護者については、スクールカウンセラーの活用と同時に「ケース会議」を開き、個別のケースに対応した指導・支援を行う。
- (5) LHR の特別授業等を用いて、いじめやLGBTQ+をはじめとする人権教育を行い、生徒の人権意識を高める。
- (6) 教員に対し「いじめ」・「ヤングケアラー」についての研修を年1回以上行い、校内の「いじめ」・「ヤングケアラー」の早期発見に努める。
- (7) 生徒会／GAPS (Global Action Project in Suito) 活動を活性化し、学校行事やボランティアなどの体験的活動を充実させ、生徒の「生きる力」と共に「最後までやり切る力」を育む。
- (8) 生徒に対して SNS／ネット安全教育を1回実施し、生徒の情報リテラシーを高める。
- (9) 成人年齢に引き下げに伴い、高校3年生までに主権者教育と金融教育を、外部講師等を活用しそれぞれ1回以上行い、成人としての責任の一端を生徒に理解させる。
- (10) 災害や事故に備えて、マニュアル整備や情報提供システムを整備し、学校内の全ての人命を守る。
- (11) 学校教育自己診断を活用し、学校の教育力、教職員・生徒・保護者のニーズの分析を行っていく。

※支援を要する生徒に対して「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成実施率を令和10年度まで100%を維持する。
(R5:80%、R6:100%、R7:100%)

※「自主的な活動が活発である」の肯定率を令和10年度までに90%以上にする。(R5:50.5%、R6:82.3%、R7:79.7%)

5. 進路指導を強化する

- (1) 進路選択に向け、高校1年生では「進路の方向性の選択」、2年生では「行動に移す」、3年生では「最後までやり抜く」というテーマを設定し、キャリア教育を行うと同時に、生徒自らの進路目標を立てさせることを通して学習意欲を高める。
- (2) 学習到達度を定期的に測定しながら、生徒の自己実現に向け基礎学力の定着と共に、進路に合わせた活動についての指導を行う。
- (3) 主に高校の学年団と進路指導部が、進路情報を積極的に活用し、生徒が自主的に進路の選択ができるようにサポートする。
- (4) 多くの海外の高等学校との交流を持ち、その中から姉妹校、連携校を確保し、国際交流の環境を整え生徒の海外進学志向の促進を図る。
- (5) 保護者に対しても、現在の大学進学、本校の進路指導の方針等を伝える機会を設け、生徒の進路選択に向けたサポート体制を築く。

※学校教育自己診断を用いて、学校の教育力分析を行っていく。

※令和10年度まで進路指導研修会の開催について、年間3回以上を維持する。(R5:3回、R6:3回、R7:3回)

※令和10年度まで海外大学進学説明会の開催について、年間1回以上を維持し、海外大学進学をめざす生徒の支援を行う。
(R5:3回、R6:3回、R7:3回)

※令和10年度までに、保護者に対して進路指導についての説明会を各学年において年間2回以上実施する。(新規)

※令和10年度までにめざす大学合格者数 *R7の数値は3月3日

	国公立大学	海外大学	総合型・学校推薦型	指定校推薦型
合格者	40 (のべ人数)	40 (のべ人数)	80 (のべ人数)	20
実績	R5:15、R6:31、R7:19	R5:36、R6:22、R7:24	R5:105、R6:56、R7:46	R5:6、R6:8、R7:7

6. 校務整理と人材育成を図り、教育効果の高い学校運営を行う

- (1) 各学年・分掌の長の責任と権限委譲を促進する事により、効果的かつ迅速な学校運営を行う。
- (2) 若手や女性を積極的に登用し、管理職直轄で指導する事により、人材の育成を図る。
- (3) 学校評議員の提言を踏まえ、学校運営の改善を進める。
- (4) 役割と業務の明確化、責任分担により分かりやすく働きやすい職場環境づくりを進める。定時退勤率の計測を行う。
- (5) 校内に研修担当を置き、計画的に教員の資質向上策を講じる。
- (6) 大阪府と連携し、初任者研修等の参加を促し、教員研修を充実させる。
- (7) IB ワークショップへの参加、探究型の授業の強化のためファシリテーション研修やコーチング研修に参加する。

7. 開かれた学校づくりを行う

- (1) 学校説明会及びパンフレット等の広報媒体を充実させる。
- (2) 本校の教育方針・教育活動について、あらゆる機会・方法を活用して積極的に発信する。
- (3) 地域と連携し、「地域の教育拠点」としての機能を果たす。
- (4) 学校の特色ある教育活動について幅広く情報発信をすることにより、中学生を含む地域の方々の本校への理解を深める。
- (5) 教育委員会と連携し、本校の特徴的な取組みについての教育研修を年間2回開催し、特徴ある教育手法を広げる。
- (6) 保護者の会（仮称）を発足し、学校、生徒、保護者の3者での議論の場を設ける。
- (7) beyond 万博等を活用しながら地域と連携し、世界に関わり地域に貢献する。

※地域（行政、大学、研究機関、企業、NPO 等）を巻き込んだ地域フォーラムを令和10年度までに20団体以上の参加を得て開催する。
(R5:23団体、R6:57団体、R7:144団体)

※教員による出前授業を令和10年度までに年間3回以上行う。(R5:3回、R6:2回、R7:11回)

【学校教育自己診断の結果と分析・学校評議員からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔令和８年　　月実施分〕	学校評議員からの意見

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R7年度値]	自己評価
学 力 向 上	(1) 授業改善に取り組み、更なる授業力向上に努める	(1) 授業アンケート結果等を参考に、自己・教科の振り返りを行い、授業改善に努める。	(1) 授業満足度調査において 85%以上の肯定的な回答を獲得する。 [83.2%]	
	(2) スケジュール管理等による授業外学習時間の向上	(2) 各教科の1週間における授業外学習時間の目標を示し、自己のスケジュールを管理させる。	(2) 授業外学習時間（自宅学習）の平均を平日1時間半以上とする [41分] 休日2時間以上とする [1時間36分]	
	(3) 進路・習熟度別にクラス編成し、学習内容の理解を深める	(3) ①高校1年次の数学において、英語習熟度や数学理解度に応じた習熟度別クラスを設定する。高校2年次のGCコースにおいて数学の言語選択制を導入する。また、特に数学において内進生と外進生の差が顕著であるため、下位層に向けた数学の補習を隔週で行う。 ②高校1・2年生の英語において習熟度別授業を行う。グローバルデイを設定し、英語でのアクティビティを開催する。英語検定の補習を実施する。平日の放課後、グローバルセンターを開講し英語補習を行う。伸ばしたい、或いは補いたい能力(speakingやgrammarなど)に焦点をあて、目的意識を高くもった個別セッションを展開する。	(3) ①高校1年生の数学のGTZのCDゾーンを20%以下にする。[26%] ②英語検定の補習を年間10回実施する。[8回]	
	(4) めざすべき進路にあわせ、計画的に学力の定着と個性の伸長を図る	(4) 大学・進路情報をホームルームにおいて生徒・保護者に発信する。	(4) 保護者対象の進路説明会を年間2回以上行う。[3回]	
IB 教 育 を 推 進 す る	(1) 「総合的な学習の時間」で全生徒に対しIBのコア科目TOKを実施し、論理的思考力及び批判的思考力を育成する。	(1) TOKの授業を担当する教師の養成を行う。	(1) TOKの校内担当者対象の研修を年間5回行う。[5回]	
	(2) 「IBの学習者像」の啓発を行う。	(2) 「IBの学習者像」の啓発をHRにて行う。	(2) ホームルームや授業内に「IBの学習者像」の発信を対象学年において年間6回行う。[6回]	
	(3) IB理解を深めるために高校1年次のIB説明会を充実させる。	(3) IB説明会を高校1年次対象に行う。	(3) IB説明会に参加した高校1年生が、十分に情報を得ることができたと答えた割合を80%にする。[測定予定]	

府立水都国際高等学校

個性を見つ け、そのス キルを伸ば す	(1) キャリア教育を中学1年から段階的に進め、各自の個性、能力を認識させる機会を作る。 (2) 英語教育や国際理解教育の機会を充実し、英語への興味関心を高めると同時に、英語4技能5領域を総合的に学習し、発信力を向上させる。 (3) 英語以外の教科や課外活動等で知識や技能を向上させる。進路実現に向けた実績となりうる活動（検定、コンテスト参加、ボランティア活動）を促進する。 (4) 探究・TOKを通して、生徒各自の興味の方向性を理解させ、自身の意見を述べる態度を育成する。	(1) 大学の模擬授業、海外大学進学説明会、進路確定者交流会など、キャリア教育に関する取組みを行う。 (2) 5月、11月に TOEFL Jr または ITP を実施し、それに向けた取組みを行う。 (3) 英語弁論大会、WWL（ワールドワイドラーニング）等、各教科会にてコンテストを1つ定め、出場する。そして各教科内での役割分担としてコンテスト担当教員を決め、コンテスト選定、紹介、生徒への奨励・選抜を行っていく。 (4) 探究、TOK の中で中間発表、成果発表を実施する。	(1) キャリア教育に関する取組みを年間10回行う。[15回] (2) 下記の英語の CEFR 目標を達成する。 高校1年 A2 100%、B1 70% 高校2年 B1 60%、B2 15% 高校3年 B1 70%、B2 30% [高校1年 A2 99%、B1 50% 高校2年 B1 50%、B2 5% 高校3年 B1 67%、B2 23%] (3) 学校外の大会・コンテストの出場者(1回以上)を全生徒の 75%にする。[70%] (4) 外部に公開する生徒による探究またはTOKの発表・プレゼンテーションの機会を、年2回以上行う。[2回]	
生徒・教職員が安心して生活できる環境づくりを行う	(1) 「生徒の行動規範 Suito Model を通じて社会の一員として通用する責任感・基礎的スキルの土台作りを行う。 (2) 個別に支援が必要な生徒への対応については、校内の特別支援委員会を中心に、きめ細やかな運用を行う。 (3) 生徒会／GAPS 活動を活性化し、学校行事やボランティアなどの体験的活動を充実させ、「生きる力」を育む。 (4) 様々な取組みの中で、人権意識を高める。	(1) Suito Model を啓発のための取組みを生徒と共に取組みを行う。 (2) スペシャルニーズコミッティーの活動を通して、支援を要する生徒に対して「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」の作成実施を行う。 (3) 体育祭、文化祭、GAPS 活動、ボランティア活動において生徒が活動目標、内容を決定し、より主体的に活動を進める。 (4) LHR の特別授業を用い「いじめについて考える日」「YMCA の取り組むピンクシャツデー」「制服を通してLGBTQを考える」を実施する。	(1) Suito Model を使い、教員研修を3回行う。[1回] (2) 支援を要する生徒に対して「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」の作成実施率を100%にする。[100%] (3) 「自主的な活動が活発である」の肯定率を90%にする。[79.7%] (4) アンケートにて「人権について学ぶ機会がある」の回答を90%以上にする。[87.0%]	
進路指導を強化する	(1) 学習到達度を定期的に測定しながら、自己実現に向けた具体的な支援を行う。 (2) 海外進学志向の促進を図る。	(1) 各種外部模試試験（総合学力テスト、大学共通テスト模試、思考力課題発見テスト、TOEFL Jr）を行い、学習到達度を測定し、支援を行う。 (2) 海外大学進学説明会、海外進学の個別面談、特別授業のグローバルデイにおいて海外での生活や勉強、働く事についての授業を行い、海外大学進学をめざす生徒の支援を行う。具体的には外部企業による海外大学説明会に加え、水都国際がもつ人的リソースを利用し、教職員の海外進学体験談を実施し、身近な career のロールモデルを提示する。また費用面による海外進学の敬遠を防ぐため、利用可能な奨学金情報をクラスルームから流し、給付型の奨学金がセットになった海外進学プログラムの説明会を行う。	(1) 教育産業が提供する外部評価基準（GTZ）においてAゾーン以上を高校1年生で40%、高校2年生で50%以上にする。 [高校1年生：40%] [高校2年生：40%] (2) 校内の進路希望調査において、高校2年生の海外大学進学への希望を示す値で、5段階のうち平均3.0にする。[2.1]	
校務整理	(1) 役割と業務の明確化、責任分担により分かりやすく働きや	(1) ア 役割に応じた主任主導のOJTを進める。	(1) ア 校務に関する研修に参加した教員が、校内全体に伝達研修を3回以	

府立水都国際高等学校

と人材育成を図り、教育効果の高い学校運営を行う	すい職場環境づくりを進める (2) オンライン授業においてグループ討議や双方向の授業メソッドの充実を図る。 (3) 役割と業務の明確化、責任分担により分かりやすく働きやすい職場環境づくりを進める。	イ IBワークショップへの参加、探究型の授業の強化のためファシリテーション研修やコーチング研修に参加する。 (2) ICT 研修を行い双方向授業やグループワーク等のオンライン授業力の向上を図る。 (3) 計画的な業務推進を行い、残業時間のコントロールを行う。	上行う。 [1回] イ 探究型の授業に関する研修に20名の教師を参加させる。[53名] (2) 双方向授業やグループワーク等のICT 研修を年3回行う。[1回] (3) 部活動の年間計画および時間管理を行い、年3回(学期ごと)評価を行いコントロールする。[3回]	
開かれた学校づくりを行う	(1) 地域や保護者の声を聞き取る仕組み作りを行い、教育に反映させる。 (2) 学校の特色ある教育活動について幅広く情報発信をすることにより、中学生を含む地域の方々に本校の理解を深めてもらう。	(1) 保護者の会(仮称)と連携を取り、保護者と学校との意見交換を積極的に行う。 (2) ア 地域の小中学校、教育大学へ、教員や生徒による出前授業を実施する。 イ 教育委員会と連携し、本校の特徴的な取組みについての教育研修を実施する。	(1) 保護者の会をサポートし、取組みを、年に3回行う。[11回] (2) ア 教員による出前授業を年間3回行う。[11回] イ 本校の特徴的な取組みについての教育研修を年間4回開催する。[7回]	